

hgu_LAB. MAGAZINE

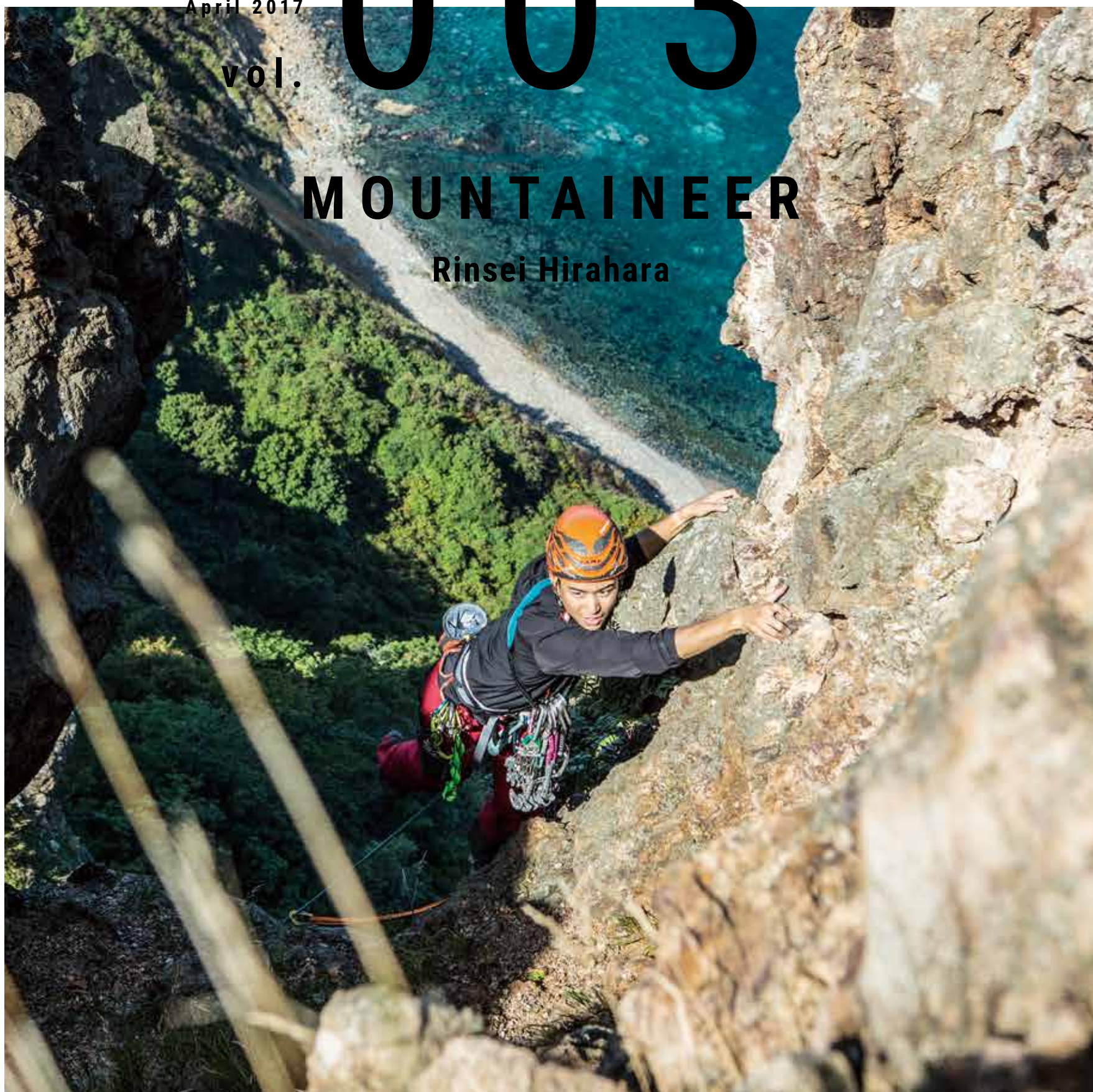
003

April 2017

vol.

MOUNTAINEER

Rinsei Hirahara



HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY

What is adventure? Coming back alive.

Naomi Uemura

Rinsei
Hirahara

平原 綸世

北海学園大学 工学部
建築学科3年
札幌第一高等学校出身

札幌生まれ。大学で建築を専攻しながら、山岳部にも所属し、北海道を中心に年間30回ほど山に挑んでいる。いつも大切にしているのは、昭和を代表する世界的冒険家・植村直己の言葉、「冒険で死んではいけない。生きて戻ってくることが絶対、何よりの前提である。冒険とは生きて帰ることなんです」。

感覚が開き、研ぎ澄まされる。 そんな瞬間がたまらないんです。

「この森を抜ければ、きっと明るい道が拓けているはず」
「登るのは時間がかかるけれど、下りるのはあっという間だよね」
「一直線では行けないさ。曲がりくねった道の先に頂上が待っているんだ」
……という感じで、人生はよく「山」に喩えられます。
では、本物の山に登っている人は、何を感じながら登っているのでしょうか。
山岳部のメンバーとして山に挑みつづける平原綸世さん、教えてください。

人と違うことがやりたいくて

—— 山に登り始めたのはいつごろから？

祖母が登山をする人だったので、小さなころに藻岩山などの低い山について行ったことはあるんですが、1,000mを超えるような山に初めて登ったのは高校2年生のときです。ひとりで札幌から樽前山（苫小牧の北西部）まで自転車で行って。

—— どうして登ってみようと思ったんですか？

高校の先生が学生時代に山をやっていて、その経験をよく話してくれたんです。冬山と一緒に登っていた先輩が100mも滑落する事態になったけれど、ビバーク（緊急的に野外で一夜を過ごすこと）をして無事に下山できたとか。そういう話を聞いていて、登山っておもしろそうだなと思ったのがきっかけですね。ちょうど、人と違うことをやってみたいと思っていた時期でもあったので、思いきって行ってみよう。

—— そうして大学では山岳部にも入ったわけですが、山の魅力とは？

言葉にしづらいんですよ（笑）。頂上を踏んだときのうれしさに余韻があって、下山後もけっこう続くんですよ。苦しんだ分だけその余韻に深みもあります。

—— それで「また登りたい」となって、次をめざしてしまうんですね？

そうですね。季節を問わず、2週間に一度は行っていると思います。今年の1月1日は、山岳部のOBと大雪

山系のニペソツ山にいました。この山の「デルタルンゼ」というルンゼ（水の浸食作用によってできた険しい崖壁の溝）をどうしてもスキーで滑りたくて。実際、最高に気持ちよかったですね（笑）

—— 北海道内の山を中心に？

基本は道内ですが、昨年5月には飛騨山脈の立山連峰にある剱岳（つるぎだけ）に行ってきました。全国の大学から山岳部の学生が集まる登山研修会に参加したんです。日本を代表する一流の登山家が講師を務めてくれて、さまざまな技術、山岳部のリーダーとしての心構えや安全管理、時間管理などを1週間かけてみっちり学ぶことができました。大変でしたが、レベルの高い学生からいい刺激を受けることができ、本当に行っていた良かったです。研修会での経験を活かして、部活動も厳しくやっていきたいですね（笑）

「山を登る」では言葉足らず

—— 山岳部について教えてください。

現在、部員は自分を入れて3名だけなんですけど、OBとのつながりが強く、現役の部員をサポートしてくれています。自分が山に行くのは、すべて部活動の一環なので、大学に登山計画書を届け出しています。また、毎回報告書を書き、年に一度冊子にまとめてOBに郵送しています。これらの書類作成にけっこうな時間がかかるんですね。きちんと書かないとOBのみなさんに怒られてしまいますので（笑）

—— 今回、取材・撮影で小樽の赤岩山に同行させていただきました。その際もOBの和田さんがご一緒でしたね（ページ下部に登場）。

もう山をやっていないOBも多いんですが、和田さんをはじめ数名の方は現役学生を積極的に連れていってくれて、技術や考え方を教えてくれるんです。本当にありがたい存在ですね。

—— ところで、お話のなかに「山をやる」という言い方が何度か出てきていますが、「山を登る」とは少し違うニュアンスなんですか？

「登る」だと不十分な感じなんです。普通に足で登るだけでなく、ロッククライミングのように手足を使って登ることもありますし、さらにスキーで滑ったりもするので、それらをひとこと言おうとすると「山をやる」となるんですね。

—— なるほど。赤岩山でロッククライミングを見せてもらいましたが、たしかにあれは一般的にイメージする「山登り」とは別物ですよ（笑）

自分も大学に入ってから始めたので、やっと体の使い方がわかってきた段階です。最初は腕や指先に力が入りすぎて、すぐにパンパンになってしまって（笑）。なるべく重心を岩に近づけて、全身の筋力で安定させる感じですね。ロッククライミング、楽しいですよ。冬になればアイスクライミングも最高です。アイスバイルという先の尖った道具を両手に持って、氷の壁に刺しながら登っていくんですが、バイルの長さの分、傾斜が急に感じるんです。一見ロッククライミングと似ていますが、まったく別の楽しさがありますね。

人の後ろはつまらない

—— 山岳部OB同士は、よくお会いになるんですか？

和田 年に一度OB総会があって、みんな昔話を語りに来るんですよ。あとは現役学生の顔を見たくてね。

平原 ぼくが和田さんと初めてお会いしたのも、1年生のときのOB総会でした。50人ほどいらっちゃって、圧倒されてしまったのを覚えています（笑）

—— おふたりは親子ほどの年齢差がありますよね？

平原 和田さんの娘さんとぼくが同じ年なんです。

和田 父親が自分と同じ年の大学生と山に行くのが不思議みたい。まあでも、平原は本当に山が好きですよ。自分で考えて行動するのが彼のよさですね。

平原 いえ、まだまだ修行中の身ですので、和田さんにはいろいろと学ばせてもらっています。きちんと方向を確認してから歩き出すとか（笑）

和田 それはウソ。逆だろ。おれが歩き出したら、それは違うんじゃないかと平原がよく言うじゃないか（笑）。まあ、本当に危険なときと、そうではないときの判断を最初のうちはしてあげる必要があるけれど、いつまでも人の後ろを歩いてもつまらない。もうすぐわれわれの出番もなくなるでしょう。今度は彼が後輩に受け継いでいってほしいですね。

平原 再来週には現役だけで行く予定もあります。

—— それはそれで、寂しいのでは？

和田 たしかに。遊んでくれる人がいなくなるのは、ちょっと寂しいね。ヒマラヤも計画しているそうだよな。おれも連れて行ってくれ（笑）

Riyo Wada

和田 理世 さん
経済学部 経営学科 1 部
昭和62年(1987年)卒
山岳部OB
北海道銀行 勤務

My Mentor

2016年9月、小樽・赤岩山にて





ゾットする＝楽しい

—— 崖の上での撮影は、スタッフ一同、足がすくみました。高い所はまったく問題なく？
いえ、実は苦手です（笑）。ロッククライミングなどは、登っている途中に下を見るとゾットしますね。

—— どうして自分はわざわざ苦手な場所をめざすのかという自己矛盾は感じないですか？
んー、やっぱりスリルや刺激を求めているんですかね。普通じゃない、しびれるような環境に身を置かないとダメになってしまいました（笑）。どんどん感覚が開き、研ぎ澄まされていく感じがたまりませんね。

—— ということは、何も起きずにスイスイ登れちゃうと楽しくないんでしょうね。
そうですね。あまり楽しくないですね。

—— 道に迷っても楽しい？
迷うことはけっこうありますよ（笑）。利尻岳に行ったときはひどい天気で、結局山頂を踏めずに途中の避難小屋で1泊したんですが、行きも帰りも本当に視界が真っ白で大変でした（笑）。

—— 笑顔ですね（笑）。もう普通の感覚ではない平原くんですが、プロはさらに普通じゃない？
もう、信じられないですよ。標高の高い所で、ほんの少しの出っ張りにスリングをかけて、ロープを垂らして懸垂下降をしたりとか。自分はまだそこまで突っ込めないですね。

—— この人は本当にヤバイという人は？
んー、たくさんいますけど、たとえば山野井泰史さんは、ぶっ飛んでます（笑）。「天国にいちばん近いクライマー」とも呼ばれていて、そこにはいろんな意味が含まれていると思いますが、標高というよりも、難所を攻めるんですね。それと、スキーではスイス人のジェレミー・ヘイツ。ウソみたいな傾斜の崖を滑っていて、めっちゃカッコいいです。

建築も刺激的なデザインに

—— 山岳部員として、卒業までに達成したい目標は？
学生時代の最終目標としては、ヒマラヤ山脈のランシサリ峰を考えています。標高は6,500mほど。まだ計画を詰められていませんが、チャンスがあるなら卒業間際かなと。高度順応をしながらなので、おそらく

1か月ほどはかかると思います。

—— 時間もかかりますが、お金もかかりそうですね。旅費、滞在費、入山料も含めるとかなりの額になると思います。貯金をするのはもちろん、OBにもカンパをお願いして、なんとか実現したいですね。

—— 登山靴やテントなどなど、さまざまな装備にも、常日頃からお金がかかっているのでは？
そこなんですよ、問題は（笑）。プールの監視員のアルバイトをしたり、もう使っていない装備がないかをOBに聞いてみたり。もちろん部で所有している装備も活用しながら、なんとかやりくりしている感じです。なんにせよ、ヒマラヤ、行きたいですね！

—— ところで、建築学科にはどうして？
小学生のころから、まちを歩くたびに「この家、カッコいいな」と思ったりすることが多くて、漠然と建築に興味を抱いていたんですが、高校では文系だったので諦めていました。でも、北海学園大学の建築学科はセンター試験の文系科目を使って受験できることを知り、これはチャンスかもしれないと。入学までは不安もありましたが、先生方が親身に指導してくださるので、しっかり学んでいます。建築のデザインをするという目標に向かって、これからがんばっていきます。

—— どんな建築をつくりたいですか？
見た人をあっと言わせられるような建築です。

—— 建築も山と同じで、刺激的に？
そうですね。曲線を使ったり、床と壁と天井の境がなかったりする、おもしろい建築を。

—— いずれにせよ、プロの登山家をめざすのではなく、建築を仕事にしようと考えている？
はい。でも、山はずっと続けます。卒業後はもっと広く仲間を求めて、もっと突っ込んでいきたいです。建築業界などクリエイティブな世界には、山好きが多いと聞いているので、出会いを楽しみにしています。

My Favorite Teachers

山と建築、体験芸術としてのつながり

—— 米田先生は「建築計画Ⅰ」、植田先生は「空間デザイン演習Ⅰ」で平原くんに指導されているということですが、この住宅模型はどちらの授業で？

植田 これは「空間デザイン演習Ⅰ」で先日提出してもらった模型ですね。曲線を駆使した、ものすごい豪邸です（笑）。実はぼくも山をやっていたことがあって、平原くんと話をしていると、山での豊かな空間体験がこの模型に投影されているのかなと感じます。空間の広さと狭さ、明るさと暗さをうまくつないでいる感じは、まさに谷間を登った先に明るく開ける場所があるような感じに近いんですね。

平原 模型というのはまず設計図があって、それを元にパーツを組み合わせていくものですが、これは設計図なしで感覚に任せて組んでいきました。それでこういう感じになってしまいました。

米田 山も建築も、空間を体験することによる感動という部分で共通点がありますよね。平原くんが意識しているかどうかはわからないけれど、無意識に両者を重ねている部分はあるかもしれません。山だけに限

らず、映画を観たり、小説を読んだり、感動した経験をたくさんもっている人ほど心が豊かだし、その豊かさが創作活動に反映されるんだと思います。

平原 まったく自覚はありませんでした（笑）。でも、言われてみるとそういう部分はある気がします。

植田 まあ、まだまだ表現しきれていない部分があるのは自分でもわかっていると思うので、ある程度のテクニックが備わる3年生の後半あたりに、この住宅にあらためて取り組んでみてもいいかもしれないですね。

米田 ところで建築のおもしろさは、どんなところに感じていますか？

平原 自分の考えたことをかたちにして人に見せられることです。変換器みたいな感じがしています。

米田 そうだね。自分の感性を通していろんな結果を生み出す。この課題でも、学生の数だけ異なる形状の住宅が生まれるわけです。それが建築のおもしろさで、そう思ってくれているなら将来が楽しみです。建築のどんな分野に進みたいと思っていますか？

平原 やっぱり設計して表現する仕事がしたいです。

—— そのために、なにかアドバイスはありますか？

植田 「よく遊び、よく学べ」ですね。製図室で設計に取り組むのも大切ですが、それだけでは感性が広がりません。たとえば、名建築をたくさん見に行くのは、とても大事なことです。道内の名建築は限られているので、長期休暇などには道外に出かけてほしいです。山だけでなく、街も歩きましょう（笑）

米田 そうですね。表現したいのなら、実際に表現された作品を体験することが大切です。もちろん書物を読んだり、話を聞きながら得られることもあります。

いちばんストレートに理解できるのはやっぱり実体験なんですよ。それは山に行く平原くんならよくわかると思います。山も建築も、体験芸術といってもいいかもしれない。五感がフルに動かされる体験をたくさんしてほしいと思います。それと雑学。建築以外のいろいろな経験を建築にフィードバックすることができるので、数多くの表現芸術にふれてください。

植田 その点で北海学園大学の学生たちは幸せだなと思うのが、ここの図書館。各分野の蔵書が本当に充実していて、僕もかなり活用しています（笑）

平原 よく遊び、よく学べ。これは関係ないと切り捨てず、いろいろなことに興味をもって、それを五感で感じながら建築に活かしていきたいと思います。

米田 そうしてもちろん、建築自体もとても広い世界で、そんなに簡単なものではないから、しっかり勉強する時間も必要だと思います。たとえば4年生が卒業設計に取り組んでいるデザインスタジオにも、時間の許す限り遠慮せずに入出入りして、制作を手伝いながら技術を磨いていくのもいいと思いますよ。模型用の小さな椅子を何脚も作ったりね（笑）

植田 ひたすらコツコツと（笑）

平原 そういう点でも建築は登山と似ているかもしれないです。何時間も淡々と歩いていますから（笑）

Satoshi Ueda

植田 暁
工学部 建築学科
非常勤講師

Hiroshi Yoneta

米田 浩志
工学部 建築学科
教授

My Favorite Shop



アジャンタ インドカリイ店

札幌市中央区南29条西10丁目
1140-12（仲通り東向き）
011-521-7040
11:30～15:00
金曜日定休

とり…………… 1,100円
やさい …………… 1,200円
とりやさい…………… 1,800円
らむ …………… 1,200円
かしみいる …………… 1,200円

※2017年5月中旬に上記住所に移転予定
（その他は2017年2月の情報です）

沁みわたるスパイシーな刺激！ 山の次に大好物です。

いただきます。んー、やっぱりおいしいです。このお店には小さいころに家族と来ていたんですが、自宅と山鼻キャンパスの間にあるので、最近またちょくちょく来るようになりました。自分のなかでは、ここのカレーがいちばんです。インドの要素が散りばめられた空間もいいですね。インド、ヒマラヤ…そこで山とつながってくる（笑）。いつもオーダーするのは「とり」か「らむ」。最近はこの「らむ」が多いかな。

とはいえ、そんなに頻繁に来ることはできません。山にもかなりお金がかかりますので、普段はできるだけ節約しているんです。大学に行く前に大きな容器にごはんだけ詰めて、昼はカップラーメンをおかずにしてそのごはんを食べることも。山岳部のOBからも「たくさん食べろ。最終的には食えるやつが強いんだ」と言われていて、とりあえず食いまくるようにはなりましたね。それにしても、やっぱりここのカレーは最高です。スパイスの感じが、すごく波長が合うというか、沁みてきます。ごちそうさまでした！

My Favorite Things



MERU
KayLand
CARAVAN

登山靴は何足か履き分けています。冬靴だけでもアイスクライミング用や厳冬期用など、いくつか持っていますね。ケイランドのメルーは夏靴で、自分の足によくフィットします。実はこのメルー、2足目なんですよ。1シーズンで壊れてしまって、修理に出したら新品と交換になりました。修理できないレベルの損傷だったということですが、頑丈な山道具を作っている会社のプライドとして、無償交換になったんだと思います。ちなみにこの名前、ヒマラヤ山脈のメルー峰に由来しています。



青春を山に賭けて

植村 直己
文春文庫

祖母が若いころ山に登っていたので、この本は昔から家にありました。山岳部に入ってから初めて読んだのですが、本当に文字どおり青春を山に賭けている内容で、行動力が凄まじいです。自分にとってはスーパーマンで、めざしたい存在です。今も時々読み返していますね。



北海道の山と谷

「北海道の山と谷」再刊委員会
北海道撮影社

北海道で山に登る人は必携の1冊です。それぞれの山のルートごとに解説されていて、登山計画を立てるときに欠かせません。尾根や沢などの位置関係を示した概念図がとてもわかりやすく、自分で概念図を描くときの参考にもなります。人生でいちばん開いている本ですね。



Fight or Flight

Hoobastank
UNIVERSAL MUSIC

アメリカのバンドが2012年にリリースしたアルバムです。自分的にはベストな内容で、家で勉強したり登山計画を立てるときに聴いています。あとは山に登った際、テントの中で就寝前に(笑)。悪天候の場合は丸一日テントで過ごすこともあるので、音楽は欠かせない存在です。



RADARLOCK

Oakley
MIRARI JAPAN

サングラスなしで山には行けません。とくに冬は雪目になってしまうので。オークリーはカッコよくて、見やすく、傷にも強いのがいいですね。このレーダーロックは独自のレンズ交換システムを採用していて、凍りついて見えづらくなったレンズも素早く変えられる優れものです。



SNICKERS®

MARS JAPAN

登山の途中、休憩ごとに口に入れる補助食です。普段は50分歩いて、10分休憩という感じで登っていきます。ほかのシリアルなどと合わせてカロリー計算をして持って行くんですが、ルートによって量が変わるので、これまで最低は3本、最高は10本ぐらいだったと思います。



ルートビア

A&W
湧川商会

最初に出会ったのは、高校の修学旅行で沖縄を訪れたとき。「なんだこれは!」という衝撃的な味に驚いたんですが、今ではクセになってしまいました(笑)。札幌で売っている店は限られますが、自分はいつも大通のオーロラタウンにある沖縄物産のお店で買っています。ぜひ!



地形図(2万5000分の1)

国土交通省 国土地理院

山に登るときに折り畳んで携帯します。行きたい山があれば、その地形図を買うので、どんどん増えていくんですね。以前買ったのを忘れて、同じものを2つぐらい持っていたりも(笑)。大通のジュンク堂でいつも購入しています。日本全国の山を網羅している書店なんです。



西洋建築史図集

日本建築学会
彰国社

自分はもともと文系で、とくに歴史が好き。大学に入ってから、和洋を問わず建築史の講義はとても興味深く学んでいます。中学校・高校時代に歴史の図集を見るのが楽しかったように、今は建築史の図集にハマっている感じで、授業以外の時間もパラパラと眺めていますね。